

回復期リハビリテーション病棟における各職種間の情報共有

～only oneプログラムシートを活用して～

かがわ総合リハビリテーション病院

看護師 樋本 知美、榎本 博文

理学療法士 竹田 大輔、作業療法士 稲井 亮介、言語聴覚士 鶴田 有佳里

キーワード：チーム医療、情報共有、協働

要旨

回復期リハビリテーション病棟において、患者を多角的にとらえ、チーム内での患者情報、目標設定などの情報を共有するツールとして、「only oneプログラムシート」を作成し平成24年4月より本格的に使用を開始した。現在の活用状況を把握しその有効性と問題点を明らかにする目的で、病棟スタッフを対象にアンケート調査を実施した。その結果、「目標の明確化・共有」、「方向性の確認と修正」などには活用できており、各職種間での情報の共有に有効との結果を得ることが出来た。その反面、日々変化する患者情報をいかに共有するかが課題で、カンファレンスのあり方の検討を継続していく必要があると考える。

1. はじめに

近年、診療報酬の改定により、回復期リハビリテーション病棟（以下回リハ病棟と略す）において、質の評価がなされチーム医療連携が重要視されている。当院回リハ病棟でも、患者を多角的にとらえ、チーム内での患者情報、目標設定、入院期間のスケジュールなどの情報を共有するツールとして、「only oneプログラムシート（以後only oneと略す）」を平成23年に作成し、平成24年4月より使用を開始した。看護師・理学療法士・作業療法士・言語聴覚士・医療ソーシャルワーカー（以下NS・PT・OT・ST・MSWと略す）が、入院2週間目に「初期カンファレンス」、以後毎月「ミニカンファレンス」を行い、only oneに現在の状況・今後の目標・経過予定などを記入するようにした。活用からおおよそ1年が経過したが、現在の活用状況を把握しその有効性と問題点を明らかにする目的で、病棟スタッフ対象にアンケート調査を実施したので報告する。

2. 対象及び方法

- ①アンケート対象:当院回リハ病棟に属するNs22名、PT13名、OT12名、ST6名
- ②アンケート実施期間：平成24年12月15日～31日
- ③アンケート内容：1.ケースリーダー以外時のonly oneの記入の有無 2.カンファレンス・ミーティング以外でのonly oneの確認の有無 3. only oneで情報共有ができていないか（4段階）4. 「only oneに記入する」「only oneを見る」ことへの意識付けと使用の有効性（項目を選択）5. only one導入前後でのスタッフの意識変化（自由記述）

3. 倫理的配慮：個人が特定されることの無いように配慮し、調査の趣旨を説明し回答のあったものについては同意を得られたとした。

4. 結果

- ①ケースリーダー以外の時にonly oneに記入したことがありますか（図1）

※ケースリーダーがカンファレンス時に記入と
していたことから、ケースリーダー以外での記入
の有無について聞いた。

「はい」がNs81.8%、PT61.5%、OT41.7%、
ST33.3%で全体では62.3%であった。

②カンファレンスやミーティング以外の場面で
only oneの確認をしていますか (図2)

「はい」がNs68.2%、PT76.9%、OT25.0%、
ST50.0%で全体では58.5%であった。

③only oneを活用することで、情報の共有が出来
ていると思いますか (図3)

「出来ている」「まあまあ出来ている」と答え
たスタッフは、Ns80.9%、PT83.3%、OT58.3%、
ST83.4%、全体で76.5%であった。

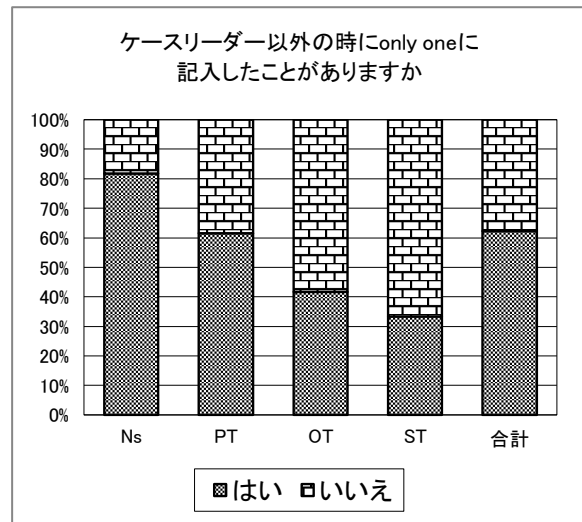
④only oneを使用して、有効と思う項目は
(図4)

目標設定(目標の明確化・目標の共有) 37%、
情報の共有(情報交換・カンファレンス結果の確
認) 24%、方針(方向性の確認・修正) 20%であ
った。

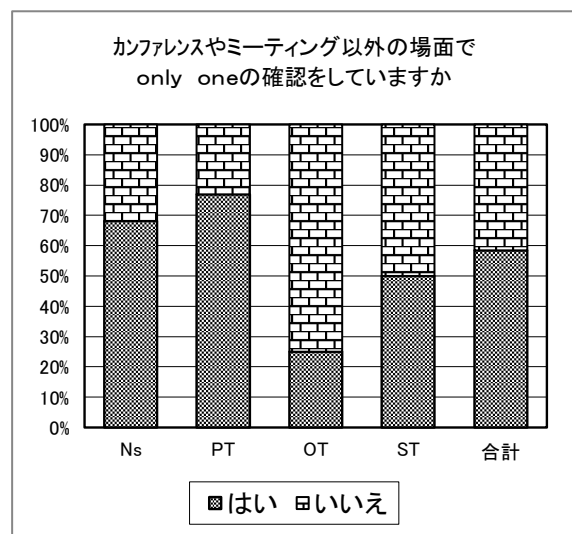
⑤only one導入前後でのスタッフの意識変化(自
由記述)(図5)

「目標が明確になった」など目標に関すること
が14件、「他部署と情報交換ができるようになった」
などチームアプローチ・情報交換に関するこ
と9件、「退院に向けた行動が意識できるようにな
った」など退院支援や方向性に関すること4件、
その他2件となった。

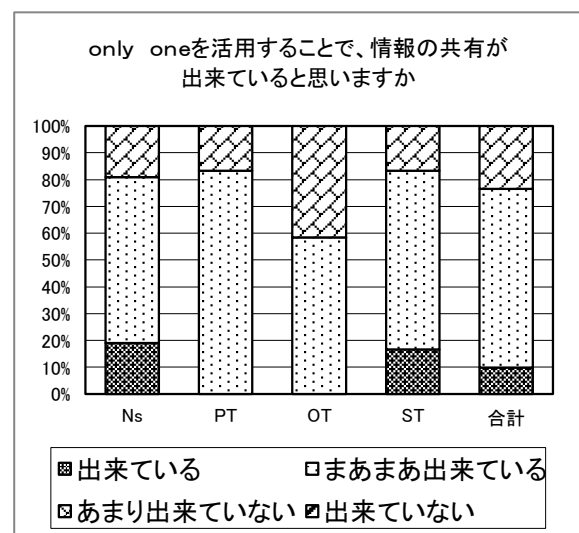
(図1)



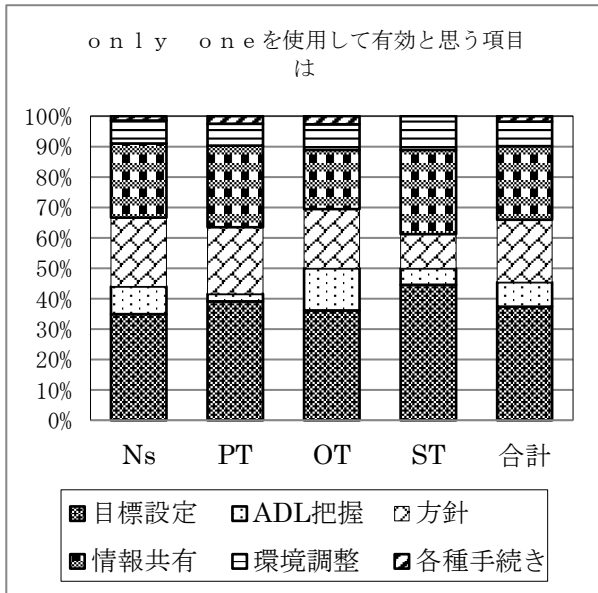
(図2)



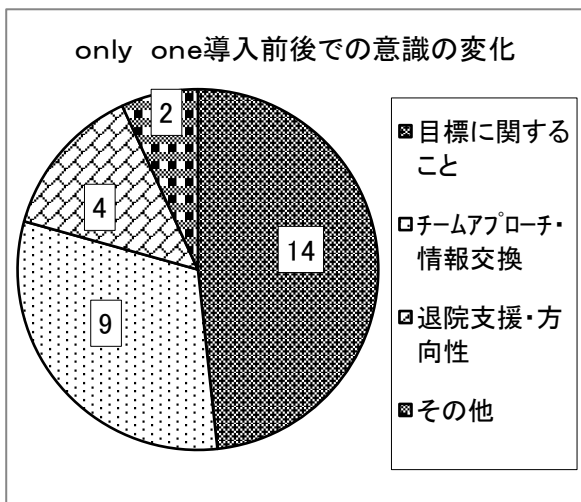
(図3)



(図4)



(図5)



5. 考察

今回、当院独自に作成した情報共有シートonly oneの活用状況と有効性、問題点を明確にする目的で、スタッフへのアンケート調査を実施した。

情報を共有するツールとして導入したonly oneの活用状況として、カンファレンスやミーティング以外の場面でonly oneを確認しているスタッフの比率はPT、Ns、ST、OTの順で多く、ST、OTの記入頻度、確認頻度が低い結果となった。その要因として、ST、OTは新人スタッフが多く、ケースリーダーになる機会が少ない為、記入に慣れていないことが上げられる。スタッフ全体で見ると、6割前後のスタッフが、カンファレンスとは別にonly oneを使用していることが分かる。このことから、「only oneに記入する」「only oneを見る」ことへの意識付けが出来てきているが、まだまだ不十分であり、引き続きonly oneの活用・定着に向けて、取り組んでいく必要があると考える。

only oneを使用しても「あまり共有できていない」と看護師の約2割が答えている原因として、日々変化する患者情報を共有することが、このシートだけでは困難であるためと思われる。その為、カンファレンスやミーティング及び日々の口頭での情報交換を行うことが必須であると考えられる。

only oneを使用することで、「目標の設定」「情報の共有」に有効とスタッフが感じている。only one導入前後の意識変化においても、「具体的な目標を意識できるようになった」「目標が明確になり訓練がしやすくなった」など、目標に関する記述に次いで、「他部署と情報交換ができるようになった」などチームアプローチや情報交換に関する内容が多数みられた。only oneを導入することで、スタッフが具体的な目標を意識し、お互いに情報交換を行うように意識が変化してきていることが窺える。

「チーム医療」とは、「医療に従事する多種多様な専門職が、それぞれの高い専門性を前提に、目的・到達目標・手段に関する情報を共有し、業務を分担しつつもお互いに連携・補完し合い、患者の状況に的確に対応した医療を提供すること¹⁾」と定義されている。only oneを使用することで具体的な目標が明確になり、各職種が何をすべきか役割を分担、さらにそれを共有するという意味でonly oneが重要な役割を担っていると言える。

リハビリテーション医療の特徴は、それぞれの専門職が、同じ患者のリハビリを目指し、協働しながら患者をサポートしていくことである。各職種が、専門性を最大限に発揮するためには、お互いが得た患者情報を共有し活かしていくことが重要であると言われている。今後も、チームで情報を共有し、専門性を活かしたチーム医療が行

と、6割前後のスタッフが、カンファレンスとは別にonly oneを使用していることが分かる。このことから、「only oneに記入する」「only oneを見る」ことへの意識付けが出来てきているが、まだまだ不十分であり、引き続きonly oneの活用・定着に向けて、取り組んでいく必要があると考える。

えるように、only oneの活用とカンファレンスのあり方の検討を継続していく必要があると考える。

6. まとめ

今回、情報共有シートonly oneの活用状況と有効性、問題点を明確にする目的で、スタッフへのアンケート調査を実施し、以下の結果を得ることができた。

- ・記入・確認頻度は各職種の中で看護師が最も多かった。
- ・活用状況としては、目標の明確化と退院後の方向性の確認・修正に活用できていた。
- ・患者情報や細かなADLの状況はonly oneに記入できないため、カンファレンス、ミーティングを効果的に運用し、情報の共有が密に行えるように検討していく必要がある。

【引用・参考文献】

- 1) 水木清久 岡本牧人 石井邦雄 他：実践チーム医療論，1版，医歯薬出版，東京，2011
- 2) 厚生労働省「チーム医療の推進について」（チーム医療の推進に関する検討会報告書：2010.3.19）
- 3) 宇都宮宏子 三輪恭子：退院支援・退院調整，1版，日本看護協会，東京，2011